

【福島大学むらの大学アーカイブ 28】 【大熊 Chapter9】

大熊をつなぐ

佐藤順さん 佐藤京子さん



【インタビュー日時・場所】

第1回インタビュー2024年9月27日・佐藤さんご自宅
第2回インタビュー2024年10月19日・佐藤さんご自宅

【聞き手】

経済経営学類 齋藤蒼真、佐原琉那

行政政策学類 遠藤結音、庄司颯杜

担当教員 鈴木敦己、実施協力 佐藤亜紀

プロフィール

順さん(兄)京子さん(妹)お二人とも大熊で生まれ育ち、
順さんは福島県内の国土調査測量を約四十年間行いました。
京子さんは東京電力に約四十年間勤務しました。

ー自己紹介をお願いします。

順：俺、佐藤順なんですけど、生まれも育ちも大熊。生まれたところはもう少しそっちの、ちっと下がったところで。ここから百メートルぐらいか。

京子：違うよ（笑）。

順：もーもーハウスってあっぺ？来る途中。あそこがうちの母の実家なの。今はモンマさんという人なんだけど、昔は羽根石さん。羽根石なんて苗字、珍しいでしょう。羽に根っこに石。その先祖さまとか、昔、福井か富山の方から来たらしいんだ。大熊の池田さんとか、あの辺みんな一緒に来た仲間なんだ。だからお寺さんとかこういうのも、一向宗というか、あっちだ。京都の西本願寺が本山で、時々あっちのほうさ、お参りさ行くんだけど。おふくろの実家だから。

そしてうちのおやじは、そこの川内の出身なの。川内でも、うちのじいちゃんは相馬なの。相馬なんだけども、相馬にいっぱいうちも土地もあったんだけども、なんせ家系的に、こういうの（賭け事）が好きなので、次男坊だったから、自分でもらった分をみんなこれで。食いつぶして、そこの熊町な、武内君の近くの熊町っていう町（現在の熊新町の辺り）があるんだけど。大熊と合併する前は、大野と熊町って分かれてた。合併して大熊になったんだけど、その熊町に、末永さんっていう町会議員なんかやった人もいたけど、そこが親戚だか何かで、うちのじいちゃんはそこに来てお世話になっていた。

ーおじいさんは相馬から新町に逃げてきたんですね。

順：んだ。逃げてきた。ほんで、危ないから今度、川内の山の中さ逃げた。

京子：迎えに来られちゃったんだって。相馬藩の藩主が。それも行きたくないから、今度また川内に逃げて。住みついた結果です。

順：今は野馬追なんていうと誰でも出てくるんだけども、昔はそれなりの人しか出られなかったらしいんだ。そしてうちのほうの先祖さまは、ほら貝ってあるでしょう、ああいうのを吹く役だった。だからみんな、ほら吹くのが好きなの。

京子：その息子たち（笑）。

順：だからこういう家系なんだわな。ほら貝だって、大変なんだっていうのな。あの維持役、大変なんだって。宗像消防隊長に言わせたら、ラッパ、あれと同じようなものなんだって。あれで出陣とかやって、ぱあっと。なんかその役だったっていったよ。だからそこで見つかって。魚屋が相馬のほうから来て、おやじが見つかったんだって。そのときうちの、おやじのおふくろだね、おらのばあちゃん、それもいたから、それも一緒に川内から相馬へ引っ張っていかれて。でもそういう経歴があるから、いられないわけだ、やつは。いづらいよな。身上みんな無くしてるんだから。そしていつの間にか逃げてきて、また（川内に戻ってきた）。

京子：ばあちゃんの実家だからね。ばあちゃんは川内の人だったから。着物もいっぱい置い

て逃げてきたって言ったよね。

順：昔はほれ、着物しかないんだわな。こんな服なんてねえから。たんすにみんな入れたのを、そのまま置いて。逃げてくるわけだから。

京子：逃げないといけないから（笑）。捕まっちゃう。

順：行ってきますなんていうんじゃないんだから。夜に逃げてくるわけだから。こんなの持ってこられないでしょう。

京子：たんすしょって来れなかった。

順：そう言ってたよ。聞いた話だから分かんないけど、親戚とかそういうのがいて、じっちにすれば、川内がよかったんだべ。

今はこんなこと言うと怒られるんだけど、昔はこじきってというのがいたんだよ。こじきって、ずっと物もらって歩いていたでしょう。そういうのが来ると、うちに泊めて。こじきの中にも優秀な人がいて、将棋なんか指す人もいたんだって。藤井聡太ではないけど。そうするとじっちゃんは将棋好きだから、泊まって将棋させられた。

京子：ばあちゃんは、シラミがいっぱい着物を熱湯で洗ってあげた。

順：そうして、うちのおじさんたちが帰ってくると、昔はいろいろだから、ここで威張って将棋指しやってるから、おじさんら、いるところないんだと。

京子：寒くてな。

順：いつの間にか、こじきが威張って「邪魔だ」なんてやってんだってよ。よくそんなこと言ってた。

それで、ここは、じいちゃんも亡くなって、ばあちゃんはいたんだけど、みんなしてこの土地を置いて、北海道に行ったんだ。川内のばあちゃんっていうのは、うちのおやじのおふくろだから、一緒に兄貴も。長男の人が。ここを捨てたっていうか、ここを置いて。あのころみんな北海道なんて行ったんだな。開拓だな。こんなとこだって、何にも大したもの取れないから、あのころ食うのが大変だったよね、食べるってことが。それで、みんなして北海道に行ったらしいよ。

—北海道へは誰が行かれたんですか。

順：おばあちゃんとうちのおじさん、二人。一番上のおじさんと。三番目のおじさんと、俺のおやじと四人で行った。

—お父さんは何番目なんですか。

順：親父、びり。四番。ぼっちだ。本当は途中で一人いて、おやじは五番目だからゴロウってつけたんだって、うちのおやじ。そしたらこの、四番目はシロウではなかったんだけど、この四番目の人が何か病気で亡くなった。ほんでゴロウってつけたら泣くんだったな、小さい頃。なんで泣くんだろうと思って、このころ拜んでもらったら、名前が悪いんだと。ゴロウと付けたから面白くないんだと。じゃあなんて付ければいい

といたら、「シロウでいいんでねえか」と。シロウと付けたら、にかっとなんて泣かなくなった。

(本当かどうか) 分かんねえよ。うちのばっばの話だもん。おじさんも言っていたな。

京子：うん。みんな言う。おばさんも言っていた。

順：北海道では、摩周湖の上がり口の、弟子屈って言ったかな。あの辺に土地もらったんだって。ところが、水がないんだって。水。摩周湖にはあんなに水(湖)あるのに。お湯(温泉)しかないんだって。それで水で苦労して、ここに逃げてきたの。

お金がなくてどうしてもこの土地を出られない人がいて、その人が今ではあの辺が、観光地になったから、えらくもうかってるって言ったよ。だから、いろいろあるわな。

京子：そういうこういう訳で、ここに来たわけ。

ー北海道から川内に戻ってきたのですか？

順：うちの母の実家だったから。うちのおやじの姉さまが後妻に入ってたから、そこに来て山仕事やってたの。そのころ、東京電力あるところは塩田、塩を作ってたのね。そこで塩たきやるのに、この辺の山の木を切って、まき作るのに、じいさまか、そのころトラックを買って、まきをこの辺の山、みんな切って、そして塩たくまきにした。その手伝いをやってた。

京子：この仕事で働いてる人、いっぱいいたんだよね。

ーそのあとに順さんが生まれたんですね。

順：昭和。昭和二十四年。四月七日。いいでしょう。八日にするとお釈迦(しゃか)様になるから、七日でいいんでないかって。して、生まれて。今度うちのおやじは、何ていうか、この。

京子：農業ができない。母の実家は農家と山の木を切り出したりなんだけど。できない。

順：北海道に行って何してたか、先生のようなまねしてたんだよね。山登りから陸上、何しろ速かったもんな。北海道大会に出たら、道の大会で百メートルで一番か二番だった。速かったんだよ。だから遊び人って、ばあちゃん言う。

京子：ピアノ弾いたりギター弾いたり。バイオリンも弾くし。

順：アコーディオン弾いたり。

京子：プロなの。何やっても。遊ぶことにかけては。

順：そったらことばっかりやってたんだ。

京子：そうなの。本当に遊び人。

一順さんが生まれた頃、母方のご実家のお仕事は何だったんですか。

京子：まきを運ぶ人たちを使ったり、農業だわね。

順：うん。まきやって、農業。田んぼをやって。田んぼもなんぼかあったんだ。あつたといつたつて、自分のうちで食うくらいかな。でも、そのまきも下火になって。今度、蚕、養蚕をやってたのね。ちょうどいい時期にうちのおやじが、昔は耕運機なんてないから、トラクターも。馬でやった。そして馬で田んぼをやって。やりたくなかつたんだらうな。そしたら今度、水をかけたら、肥やしが入つた水、抜いてみんな流れちやつたんだつて。それで母方のじつちに怒られたんだつて。

京子：そりゃそうだわ。

順：うちのおやじの兄貴が、中屋敷の山で、請け負つてやつたので、ここに逃げてきたんだつて。俺のことしよつて。俺、大五郎ちゃんみたい。

京子：「おまえは、ここさ、いろ」なんて。実家の後を継がないといけないから。

順：俺、母ちゃんの背中さ乗つて。「ちゃん」なんて来たんじゃねえの？嫌になつちゃうね。母親は婿取りみたいなもんだから。母も父の後を追つてここに来た。

一国道 288 号からここに引越してきたんですか？

順：昔、営林署の職員が泊まつたり、事務所をしていたが、林野の事業も営林署もなくなつてきたので。営林署の事務所を少し移してそのまま住むようになったの。だから俺が二十歳頃か。

京子：大人になってから。

順：昭和四十三年だつたか四十二年だかに、電気入つたんだよな。この集落に。中屋敷に電気が入つたのが。

京子：でもうちは自家発電で、営林署がここあつたから、自家発電で。

順：ここに営林署が事務所をつくつて、ディーゼル発電みたいなのでやつたんだ。だけど時間的に、九時ころで消える。

京子：止めなきゃなんない。自分でエンジンかけてやる発電機。

順：みんなのうちには電気ないから、山形のほうから、水力発電やるじいちゃんがそのころ来たんだ。そして上のうちには風力。風力なんて考え出したのがいて、こんなのやる人も来たの。そしてあゝころ、大きなプロペラでないから。このくらいのプロペラで。そうすると、風が強いとプロペラどこかに吹つ飛んでいっちゃう。今みたく立派なのでないから。それから水力は、水が出ると、発電機がどこだか流れていく。本当だつて。本当なんだ。

京子：そうそう。みんな。木の葉が詰まつたり。秋になるとみんな、大変な思いしてた。うちは別にこれだから雨風関係ないけど。

順：電気入つたから。こんなちっちゃいテレビ、こんなの買つてきて山の上にアンテナ上げてあゝころ見てたつてが、あゝ頃ボクシングだかプロレスがはやつたんだよ。力道

山だの。あの頃だから。あと、馬場の頃はもう電気あったから見られた。力道山だの、あのころはみんなして見て。テレビなんて珍しかったんだから。テレビのあるうちあったから。

京子：うちは、なくて、一番近いうちにテレビがあって、そこに夜行くんだよ。兄弟三人。田んぼだったから、その辺ずっと歩いて。

順：そこずっと、田んぼの脇上がっていくの。漫画とかもやってたんだよな。何かやってたな。そんなのを見たり、プロレス。あのころプロレスは人気あったんだね。チャンチャンって始まる、一番いいころになって、ぽっと電気消えて、あれ？あれ、何だなんて言ったら、あそこ（発電機）に、木の葉っぱ詰まっちゃったのな。

木の葉っぱいっばい落ちるでしょう。するとそこに木の葉っぱが詰まっちゃう。電気起きなくなっちゃう。風力発電は、昼間電気を起こしたやつをバッテリーさ、ためておくわけ。いつの間にかぽっとなくなって、一番いいところで、ぷうっと終わっちゃう。そんなときあったな。

漫画みたいな話だぞ。こんな時代だったぞ、ちっちゃい頃は。あと何もないよな。小さい頃はな。

京子：何にもない。

—京子さんは何年のお生まれなんですか。

京子：（昭和）二十六年七月十八（日）です。二つ違い。（もう一人）弟いる。

順：ヒロシ。佐藤ヒロシ。

京子：会津にいる。一番下。（昭和）二十八年八月八日。

順：これは覚えいいんだな。

—京子さんは小さい頃の記憶とか、思い出とかありますか。

京子：何だろう私、小さいときね。一番ちっちゃい頃、その上にうちがあった頃、うちの弟が生まれて、私二歳に弟は零歳っていうか。かわいかったんだろうね。お姉ちゃんって感じで、おぶって歩きたくて、おぶったと思ったら、まだ二歳だからそのままとととと（転んで）。ちょうどうちの庭って土間だったから、ちょっとした石があったんだよね。おでこぶちと切って。それが今でも傷残ってるの。

順：頭やったんだよね。かわいそうだ。

京子：一応、お姉ちゃんだということを見せたかったんだけど、結果オーライじゃなかったんだ。二歳で、お姉ちゃんだったので。

順：やるほうがおかしいべな。

—小学校の登下校はどのように行っていたんですか。

順：バスで。

京子：福島交通のバス。

順：あのころバスも頻繁に走って。

京子：いつもいっぱい。ぎゅうぎゅう満員。都路のほうからも来るから。

順：混んでんだから。

京子：いつも立ちんぼ。ここから乗ると、いつも大変。座れない。

順：何でも交通機関というのは、そのころ、バスしかなかったの。あとはなかったな、中学校の頃は。そんなバイクだの何もねえし。みんなバスだよな。

この辺の人らは、大野から歩いてきたんだよ。歩きで。バスがない頃は、例えば炭やまきなどを積んだ木材運ぶ車などに乗せてもらい、あとはみんな歩いてきたんだよ。ここまで十二、三キロあるからな。ここから学校さ、歩いて通った人いたんだよ。大野小学校まで。

京子：母の小学校時代だけど、私んちよりもっと奥で、歩いて通った人いるって聞いた。

順：この奥から。そして学校さ着くのが。

京子：十時とか。

順：十時、十一時ころになるから、そうしてお昼食って、そしたらまた帰んなきゃなんねえ。本当だって。漫画みてえな話だべ。それでも学校さ行かなきゃなんないのだな。その人は。

—お二人はどの辺りの小学校へ通われていたんですか。

京子：ここに分校があったの。

順：いま集会所になってるんだけど、そこに分校があったの。中屋敷分校。

京子：結構いたよね。五、六十人ぐらい。同級生も十一人。

順：大野小学校中屋敷分校といった。先生が二人。一、二、三と四、五、六と分かれてた。

京子：あんちゃんは六年生までいたけど、私は四年生から大熊のほうに。大野小学校。バスで。

—お二人の幼少期の思い出を教えてください。

京子：私のちっちゃい頃の思い出と云ったらば、その万右エ門と云ったところに、早稲田の英語の先生をやってた人で、もう年齢が七十歳ぐらいだったのかな。

あのころ、うんとおじいちゃんに見えたけど、自分もその年になったんだけど。この地区にしたら、（庭が）おとぎの国みたいだったの。うちはそれなりの普通のうちなんだけど、庭。バラのお花がいっぱい咲いて、ずっとそのうちまで行くのが、両脇ずっとマーガレットの道なの。そこに行くとイチゴが、本当におとぎの国。真っ赤っかなイチゴが畑一面。花の種の袋を見ると、外国からのお取り寄せでね。英語で書いてあるから。バラの花やらイチゴやら、見たことない花がいっぱい、庭中に咲いて。

そこに行ってアップルパイを焼いてもらったり、イチゴジャムたっぷりのパン。

そのころの時代といたら、何か焼いてもらおうといたら、小麦粉をこねて、卵の一個ぐらいを入れて砂糖を入れて、おばあちゃんがフライパンで「パン」なんて、そんなのしか食べてないのに、イチゴがいっぱいだからジャムを付けて。アップルパイみたいなのだったり、パンにジャム、なんかすごい、ここのうち、おとぎの国みたい。そして「イチゴがなったから、摘みにおいで」と言われると喜んで。イチゴの摘み方は、手を赤くしては駄目なんだって。「ここをこうやって、ポキンともぎんだよ」なんて言われて。すごいロマンチックで。小学校二年か三年かな。それがすごい、憧れの世界だったです。

順：なんであんなとこ住みついたのかな。

京子：もともとは浪江の人なんだよ。そのおじいちゃんが。

順：何だか、早稲田大学の教授とか何か言ってたんだよな。

京子：みどり号とって、そのころテレビもなきゃ映画もないの。車が来て映画を見た。

順：みどり号とって、こういう過疎地域を回って歩く、移動映画館というのがあったの。バスで来るのよ。

京子：小学一年生になった（ころ）かな。でも記憶に残ってる。

順：学校とか、こういうとこでやるんじゃないんだから。草原の広場でやるんだから。野外で。野外ステージだなんて、いまはたいしたこと言うけど。あのころのはね。

京子：結構でっかい画面（で映画を映していた）。

順：よくあんなの来たよな。

京子：あれ、うれしかったよね、子供心に。

順：最高だ。

京子：夢があるでしょう。そのイチゴのうちといい、みどり号といい。

順：「みどり号くるぞ」なんてな。

京子：わいわいしちゃったよ。

順：良かったね。

京子：あとは分校のところで盆踊りなんてもやったから。

順：バケツの穴あいたのに、ろうそくを立てて。いまならミラーボール。

京子：ここ、街灯も何にもないところ、どうやったらあんなに歩いて行けた。懐中電灯はあったのか。その分校のどこまで歩いて行ったよね。

順：太鼓はあったよな。

京子：分校にあったよ。大きな太鼓。

順：こんな太鼓。どこさ行ったんだ、あの太鼓は。

京子：分かんない。誰か持ってったでしょう。

順：やぐらもあったんだよ。やぐら。ああいうのもちゃんとあったんだよ。そしていろんなとこから盆踊りは来るんだから。ここの集落だけでねえんだから。川内のほうから

だの。

京子：都路から。だからにぎわっちゃうの。すごく。

順：昔は何もそういうのがないから、遠くのほうの集落からみんな来たらば、（遠くから歩いてくるので）盆踊り終わってたなんていうのあるんだよ。私らも都路のに行ったもんね。泊まりながら。仕事に来てる作業員の人たちのうちに泊めてもらって。ここから自転車に乗せられて、行くわけだから。

京子：すごい楽しかったかも。わりと大きくなって、中学生、高校なんてなったときなんかよりは、こういうほのぼのとした付き合いが。楽しいって感じだ。

順：出店なんてはないんだよ。（今は）いろんな出店あるでしょう。あんなのは全然なかったんだけど、太鼓で踊って、景品だなんてしょうゆ一本とかよ。

京子：たわしとか。

順：女の人。いいんだ。バケツとか。バケツだって、こんなプラスチックでねえんだ。こういう金属のバケツあるでしょう。

京子：ブリキ。

順：あんなのだの。しょうゆなんては、いいほうだわな。しょうゆ一升。あと、下手な人はたわし。こんなたわし、亀の子たわしな。あんなのをもらったり。だよ。そんなのあったよ。

京子：網わたしとかも。餅焼く網。

順：網わたし。ほんでも楽しかったんだよな。それはそれなりに。

京子：そう。それなりに。

順：（盆踊り中には）何も食べねえよ。

京子：何も無いね。

順：（飲んだりも）しない。

京子：ない。しらふ（で踊っている）。

順：だって、飲み物なんてねえもの。

—お父さんは何をされてたんですか。

順：父さんの仕事は、営林署の仕事やっていたの。それと休日には魚釣り。春になれば山菜採り、あと秋は鉄砲と、それがほとんどで。

京子：それと山菜といっても、そんな、ワラビだとかゼンマイってのは採ってこないよね。タラの芽と、モミジガサって。あれ、自分が好きなのを採ってくる。ウドも採ってくるね。

順：魚釣りなんて言ったらば、あの溪流。われわれにすると神様みたいなもんだよ。必ず釣りさ行くと。あのころ魚もいたかもしれないけど。

京子：『つり人』って本があるじゃない。あの雑誌社が取材に来たことがあったよ。我流でやる釣りね。

順：浪江でもどこでも行くんだけど。確かに俺もくっ付いては行ったけど、釣りはうまいな。あの人は。

京子：庭の草なんて一本もむしたくない。本当に。

順：魚の餌にする虫、釣りの餌にする虫取りさ大変だから、虫取りさやる人もいたんだ。この人は虫取り専門。魚は釣れないから。魚釣ったのを背負って歩いて。昔あったんだよ。こんなでっかいたらいにいっぱい魚。そしてそれは、半分くれてたんだな、虫取りやったから。いっぱいあって、焼くにも焼かないから。

京子：うちのお父ちゃんは、子供のこと連れて歩いてもくれるのよね。仕事仲間にそうやるのも、遊ぶも好きだけど。すごかったよね。遊びの面倒見るのが。そんなの言ったら、東京のほうから来る人たち。

順：いやあ、来る来る。

京子：ありとあらゆる人が。アメリカ人、横須賀基地？

順：横田基地。

京子：なんかね、すらっとした、黒の革ジャンがよく似合う女性もいた。爪がこんな長い、真っ赤っかで、ライフルを提げて。そんな人がいっぱい来るの。それで山に（連れて行っていた）……イノシシが、この辺にも出てきた頃なんだよね。でもみんなイノシシ狩り。ポアクラブってクラブをつくって、日通の木村さんが会長で。

その人がそこに別荘をつくってたから。その人を頼りで、その人が来ても山なんて分かるのはうちのお父さんだわね。営林署の仕事をずっとやってるから、どこでも獣道もみんな。だから、うちのお父ちゃんが案内人で。すごい女の人が。「え、真っ赤、え、革ジャン、え、ライフル」なんて。山に送っていったことがあるんだよね。檜葉の奥のほう。そうしたら山の上にも、その女の人たちががさがさ。もちろん男の人もあるけど、防衛大の教授なんかもいたよね。すごいいた。そうそうたるメンバーが。

一京子さんの中学校時代の思い出を教えてください

京子：私の中学校は、ソフトボールやってたの。県大会で一位になったことある。私は一年生で、あんちゃんと同級生たちが、みんなメインでやってたの。そうしてどんどん試合に勝って、県大会一位になったんだから。そして最後の二試合、八回、九回はファーストを守らせてもらって。それがすごい、夏なんか暑くてやってたけど、よかったなと思って。あんちゃんと同級生の女の人と、うんとかわいがってもらった。だからどこに行っても、京子京子って言われて、いまだに。

いわきのうちなんて、あんちゃんと同級生が管理して、草むしりって綺麗なの。あんな広いとこ、草一本生えてないんだよ。あんちゃんと同級。その人はレフトを守ってたの。

一京子さんの高校時代の思い出を教えてください

京子：お話で一つ。警察署のうしろ、保健所の横で、植えて悪いケシ、グビジンソウ。これが、その家いつ寄っても（あったの）。私はそのときケシの花って見たことなかったの。真っ赤。

そして塀が黒い塀なの。ところが塀にぽこんと穴があいているところがあって、そこから見たら、ものすごく綺麗な赤い花が咲いているの。「何、この花」と思って、これは学校になんて行っている場合じゃない。「ごめんください、ごめんください」、その花が欲しいわけだから。そうしたって誰もいないのね。何だろうなと思って、二、三日ごめんくださいとやっても誰もいない。

それから「よし、きょうは意を決してあの花を盗んで帰ろう」と。そうして学校で「先生すみません、ちょっと頭が痛いのですみません」なんて。得意のうそをついて「すいません」なんて帰ってきたの。そしたら私の友達がなんかうしろから「京子ちゃん」なんて来たの。「どうしたの」なんて言ったら「私、腹痛いって帰ってきたの」。え？泥棒するのに友達はいらないからさ。「まあいいか、見張りに」とか思って帰ってきた。

それでちょうど裏道なの、今の浪江の警察署のうしろ。昔はそこに保健所があったの。保健所の横になるところの、角のうちなのね。そしてそこで「カオルちゃん、きょう実は頭痛くないんだ。あそこで花を盗むのに」と。かばんはとにかく学校で開けて、そこに盗んで持っていくわけだから。そして、あのころはもっとスマートだったから、塀は下が三十センチぐらい開いてるの。そこから潜って取るから。「カオルちゃん見てて。誰か来たらあれだから」といって、その日も「ごめんください」は言ってるんだよ。

そして入って見たらすごい、一面なの。ちっちゃめのを三本ぐらいかばんに。一本花が咲いた大きいのも一つ取って折り、「早く早く行こう、行こう」なんて、たったた来たんです。

そうしたら、保健所の外に「植えて悪いケシ」ってあって、そっくりなような気がするんだけど、今度、その特徴を見たの。そうしたら、茎のところに葉が包むように生えてくるって。そして、「ん？」と。そっくりなの。せっかく学校を早退して盗んできたんだよ。「んー何だろう、でもこれを持って行って、えー」とか思って。恐る恐る保健所に行ったの。

そうするとみんな白衣なんて着てるのね。「何ね」なんていって。「あの、この」なんて、かばんからさ、「このケシなんですけど、表に、看板にあったのと同じですかね」って言ったらさ、ちゃっと返して「どこから取ってきたの」。本当に、こんな顔をしてるの。「あんたたち、どこから」、「いえ、あそこですよ」って。ちょっと出ればそこだから。そこは赤い花しか見えない。塀の高いところから、赤い花だけが一面に咲いてるの。「あそこです」なんて。「へえ？」とかって感じで。かばんをば

っと取り返して、ぱっぱとみんな開けて「名前は？」とかさ。きょうはうそをついて帰ってきてるし、どうしようってさ。「カオルちゃん帰ろう」といって。「それっ」とかいて（逃げた）。足速いの。こんなんだけどさ。そうしてカオルは、はあはあなんて、こんなになって来るんだけど。ずっと、木場魚屋って昔あったんだけど、そこまで逃げてきて、うしろを見て来ないから「ああ、よかったな」って。

来たもんね、次の日学校に。きのう実はこういうわけで、浪江高校の生徒さんにこういうあれを見つけてもらって、きょうは表彰に。頭痛くて帰ってきたって言えないじゃん。全校生徒を集められてるから顔が真っ赤になって。みんな私を見ているような気がする。誰も見ていないよね。カオルだけが「ふん」なんて見て。それで、結局は学校表彰で、校長室に表彰状が飾ってあったけど。「はあ、無事に終わった」と思ったね。逮捕されるかと思っちゃったから。そんなことありました。学校の思い出。本当に、あのときは。浪江高校で何の思い出もないけど、それはだけ。

順：こういうことだな。こちら辺で、昔は高校なんて行く人なんて、あまりいなかったんだ。みんな中学終わったら……山の木切りやったり、そういうことばかりやったよ。おらも高校なんて仕方なしに行ったようなもんだ。

京子：行けと言われるからみんな。

一京子さんは、高校を卒業したあとは、どういった生活をしていたんですか。

京子：卒業したあとは、ちょっと東京ほうに行ったんです。それも半年ぐらいで挫折して。挫折っていうか、東京電力にサービスホールってできたんだよ。見学。そこで募集してるとか言ったりなんだから、うちの親は引っ張ってきたかったんだよね。ついついそれにほだされて、「まあいいか」みたいにきて、そこで入社したの。十人ぐらい受けて一人しか通らないって。「これは落っこちたから、また東京に戻っていけるな」と思ったら、「え、採用？」みたいな。そんなことになって。入ったのは発電所の運開の頃だわね。十月一日に入ったんだけど。（年明けの）三月二十六日が一号機の運開だったんだ。そして、私の退職のときに、みんなが分館になって終わり。

だから発電所とともにというか。一号機の運開で採用されて、全部ばーんとなって終わったときが定年退職だ。何の縁でね。

一東京電力に入社する前に、京子さんは何を志していましたか？

京子：私、通訳になりたかったの。英会話学校に行くのに東京に行ったんです。親戚のおじいちゃんもいたし、おばあちゃんとか。でも、昼間はうちでもお父ちゃんのお給料で、あんちゃんは弟もいたし、私はもう昼間はヤマキ電気っていう目黒にある会社に一応学校紹介で入社して、夜間の、目黒の雅叙園のそばにあった日本通訳養成所っていうところに、これまた半年ぐらい通ったの。

一東電で働くことになったきっかけは？

京子：うちに夏休みで帰ってきたら、東京電力で一名募集しているんだってっていう話が、うちの父が知り合いの人から聞いてきたんだ。その人の娘も東京電力に勤めているから、東京のほうに行ったらろくなことないから、帰ってきて、こっちに就職するといいいよっていう勧めがあって、一応こんなんでも一人の娘なもんで、うちの父も母も近くに置いたほうが、東京に行ってあっちのほうに勤めたらもう帰ってくることもないみたいに思ったのか、で、東電が十月採用の試験が夏休みの七月末ぐらいにあるから、そのときに受けておけて言われて、そしたら十人いたんですよ。十人から一人でしょう。こんなところに入れるわけないわ、よかった、また東京に行って続きができるなと思っていたら、何だったのか、受かっちゃったのね。そう、十分の一。それで、GEっていうアメリカのゼネラルエレクトリックのカンパニーがあってそこで英会話も、学校もあったし、子どもたちの。そこだったら、オキ先生っていう先生がいて、ハーフだったんだね、その人は学校の先生だったんだけど、会話もやってくれるよっていうことだったんですよ。

まあ、いいかとか思って、本当に安易な気持ちでそっちはやめて、で、そして、十月一日から……。東京電力で見学するホール？サービスホールっていうの、本当に入り口、守衛を通らない手前に、いま壊しちゃったけど、この騒ぎで。そこにサービスホールのオープンと同時に採用、十月一日採用で。そこがスタートですね。

そこにすごい引かれたのは、八月初めだったのか、夏休みだったの。サービスホールに行ったときに一面にマツムシソウっていう花、分かるかな。そう。これは中高山的な花っていう。植物がすごく好きで、花とかの名前、今じゃ半分も忘れちゃったけど、野草が好きで、結構何でも覚えていたの。『山と溪谷』のこんな厚い本をいっぱい買って、みんなが好きだったのね。そして、この花ってこんな所に、山でもないじゃないですか。でも、環境が、海風が入る、ちょうど高い山の間ぐらいのような気候なんだなと。本当にサービスホールのまわりに一面、野生。もちろん今はないけど、私が退職する頃はもうなかったけど、それがきれいで、こんな花咲く所に、何て私、幸せみたいな、もう会社はどうでもよかったの。

私、高校のときに、ケシの花も発見したけど。花道部にいたんですよ。地化学部。そこで原子力発電所をつくって、そのとき資料をもらいにサービスホールの前身だね、できたのがあったから、プレハブ見たいなところへ行って資料をいっぱいもらってきた記憶があって、そこは私、電力会社っていうのが、ポンだから頭じゃなくて、東京電力っていう会社は土木作業の会社だと思って。広く耕していたからね。そういったとき、ここは土木屋さんなんだ、だから、うちのお父ちゃんが東京電力で募集しているって行って、友達が行っているから、京子も行ったほうがいいんじゃないかみたいな感じで、あんな土木会社、トンチンカンチンのとこ、土でも耕しているところに行ったら私もあんなことをやるのか、このぐらい思っていたほうが英会話もできて、アメリカ

カ人も、ちょっと話は違うけども面白そうだからっていうので行ったら、花がいっぱい咲いていて、何てこんなきれいな。で、建物もサービスホールができたばかりだから、やたらきれいなよ。お姫さまがいるような建物で、これならいいかとか。外人がどこにいるんだみたいな。日本人しかいないぜなんて。

一東電ではどんな仕事をしていたんですか？

京子：そこで七人いたんですね。一番偉い（部長クラスの）奉仕担当さんがいて、そのあとに課長さんクラスがいて、副長クラス、主任がいて、担当者は私だから五人か。五人しかいないね。いやいや、その五人の忙しいこと。

あの頃は、もう多い日は五、六千人ぐらい来る。お昼ご飯なんて四時ごろだから、食べるの。一カ月休みなし。で、労働組合の委員長が来て、休まないと駄目ですなんて言う。この人、私が一生懸命働いているのに、休めとは何事だみたいな、そんな感じだったのね。労働基準法なんて知らないわね、その頃。何を言っているんだろう、この人、私、だってこんな休みもなく働いているのに褒められようとも、怒られることはないじゃん、こいつになんて思ったぐらいのような、そんな仕事でしたね。

真ん中の噴水が出て、この辺ではおしゃれな。もう絶対なかったから、何も、その頃、こんな。そして、中は土木会社だと思っているしき、いまだに。そして、私の同級生とかはどこにいるだろうと、この建物には五人しかいないしき。そうなのよ。そしたら、下に大きな事務所があって、四階建ての。エレベーターって、こころ辺にエレベーターがあるのみたいにさ。東京でしか見たことないなんて、そんなで。そのうち友達にも会えたり。一般の人は誰でも来られる。子どもたちが自転車こいでなんてよく来ていたよ、双葉の奥の方からも。

見学者を案内したり、記者クラブ、福島県の民報、民友、朝日新聞、何でも来るけど、読売も。仙台河北新報だ、新潟日報とか、要するに毎週、記者クラブっていうのがあって、いつも来るんですよ。発電所の近況、状況を、もちろん事故のようなこと、誰かが人が出たとか、そういうのがあったらすぐ飛んでくるけど、NHKを筆頭に。いつもその記者クラブったら何でもサービスホールでやっていたの。今は広報課とか何かできたけど、その当時は、もう入ってくる人はみんなそこみたいな、そうなの。何でも。アメリカの上院議員なんてヘリコプターで来るんだよ、羽田から。で、グラウンドにじゅうたん敷いて。赤い毛せんで。バババババって、本当に。

GEの会社って、毎週金曜日はパーティーなのね、夜っぴて。そんなところにも行かなきゃ、夜はワンピース。私はすっかり水商売みたいな。そうなの。今ほどこんなブツクリしていなかったもんで、それなりに。ダンスは踊らなきゃいけないでしょ。そうだよ。もう本当に私はどんな会社。土木会社はどこに行った。もう本当に大変。一カ月、休日が一日もない日が何回もありましたよ。労働基準法って何？そのうちに労務課に異動になるとは思わなかった。何だったの？私のあの人生みたいに。誰

も守ってくれていないじゃんみたいな。あの頃は自由だったんだね。

すごい客が来るのよ、東京方面から。IAEA やなんて、いま視察に来たりって、あれも毎週。IAEA と、それからコロポ計画ってあって、その頃、世界的に。原子力を進めている時代だったから、原子力をつくる国の人たちがそこに見学に来るんですよ。で、その対応。本当によくやった京子さんって、今。それで体を壊しちゃって。五人いたうち三人が、胃潰瘍が二人で、私が十二指腸潰瘍。もうみんな。一人の人なんか血を吐いて倒れているんだよ。その人が倒れていてもその人を起こしたり、介抱する人は誰もいない。お掃除のおばさん、タッタタッタッと来て、そしたらその人、ここら辺血だらけになりながら、一人で運転して病院に行った。そんな、本当に過酷もいいところなの。

私も十二指腸潰瘍では、もうそれから三十歳まで、その頃十九ぐらいでしょ、それまでは順調だったんだけど、二十一、二十二ぐらいからはもう毎年二回ぐらい、その人は吐いたけど、私は下に下血して、血便になって出て、もういつの間にか気を失っているっていう感じ。何度倒れたことか。

それでそのまま三カ月ぐらい私は入院していた。もう貧血がひどいから、輸血だって百本じゃ利かないんですよ、やったの。あの頃、エイズなんて騒ぐ前だから、保存血、ほとんど冷たい血ってすごい血管痛が来るのね、頭から体中。それを一日三本ぐらい入れるんですよ、先生。会社からももちろん温かい血ももらったけど、吸血鬼なんて一時言われていた。手の空いている人でO型は佐藤さんの輸血に行ってくださいみたいに。本当なの。

何年か後に会った人が、京子さんってちょっと赤い顔をしていたんだって、いつも真っ白な壁のような色をしている人だと思っていたって。そう。すごくよかったの。今じゃ考えられないぐらいよかったの、私。最後に共立病院に行ったときは、私、がんだとばかり思ったね。うちの人みんなうそをついて、私のことを病気だと思っているけど、私はがんなんだって。その頃、まだお風呂の番組で、白血病の人のテレビをやっていたのね。私、あのお涼さんみたいに白血病で、誰も私のこと、本当のこと、あれはもう一種のノイローゼだよ。うつ病。

たまたま一緒に入院していた子が白血病で、その子が二人で同じ部屋にいて、いつも輸血だから、そしたら彼女はもう重症で、仙台の東北病院に連れていかれるっていうときに亡くなっちゃったの。私のベッドの端っこをつかんで行きたくないってね。双葉の子だったんだけど、双高に通う。もう私、あんな細い手で私のベッドをズリズリズリって引っ張る。で、看護師さんに離されて、そのまま行って亡くなっちゃって、病院からお葬式に行ったもんね、私。

だから、本当にそういう人とばかり、部屋が貧血っていうだけで同じ人といたから、もう大変。あなたはこんな仕事は合わないよ。それで事務系の。それで行ったらこんな椅子に座った仕事があったの、この会社に。常に吹っ飛んで歩いてさ。

椅子に座ってやる仕事、あったんだ。あのときの幸せ感っていったらなかったね。座ってられるっていうだけで。それから二、三回起こしたね。三十ぐらいまではとにかくあれに悩まされ、十二指腸潰瘍に。

そういうサービスホール、発電所と共についていうか、発電所のオープンで採用され、発電所が壊れて退職って、複雑です。

それで普通の事務系の仕事に入って、すぐに今度、そのときの副所長に、君はここに来て幸せそうな顔をしているねなんて言われて。いや、座ってられるんですよ、私。そしたら、座ってられるのもいいけど、ここじゃあれだからって、発電課っていう五、六号の試運転課に行ったんです、最初サービスホールから。ちょっと暇だったのかな。まだ五、六号の試運転だから。

そしたらそこに事務系の副所長が来て、佐藤さん、今度は労務で仕事してみないかなんてさ。給料と賞与とか、組合対応をしていりゃいいんだよ。いいか、それでもと思って行ったら、もう大変、ここも。ただ、サービスホールのつらさから見たらどの仕事も楽だったね。そう。座ってられるみたいに。そのあとが、退職五、六年前に広報になったんですよ。

広報では、そういう町長さんとか議員さん、区長さんのところの挨拶回り。会社での出来事説明。で、回って歩く。今度は立って歩かないといけない、座ってられない。広報になったら「またかい」みたい。でも、そんな人生でしたね。会社の人生。

一 労務課に移ったのは何年ぐらいですか？

京子：何年だったんだろうかね。何年前って言われるとあれだけど、会社に入って十年目ぐらいで労務になったんですね。で、そこにもう二十年近くいたかな。そして、あと、二十何年だね。広報で七年ぐらいいたのかな、足かけ。だから、広報っていうのは何度も言われていたんだけど、当時の労務課長が、広報はいいから、いつでも行けるからとか。労務にいてくれ、労務でやってくれとか言われて。労務は社員の給料とかボーナスとか、あと、サービス関係、サービス規律とか、ちょっと厳しいほうをずっとやっていて、副長になって、今度生活面も見られるようになって、今度は所長のあいさつ文を書いたり。

一 避難当時の生活を教えてください

京子：会津のほうの。葛尾と楢葉のほうの、あっちに避難してたから。（会社から）「あんた一人、いいところに避難してくれたね」。会津方面での会社の説明をしてくれと。

ほんでその、あんちゃんが役場関係の仕事をしてたから、えらい助かった。葛尾というのはあんまり私行かなかったの。行く時も、私は回って歩くのも大熊か双葉だったから。

そうしたら、一番最初に避難してたときに、「あんた親切な人だね」なんて、葛尾

の人に。要は、プレスがあるとき以外は私もあれだから、物資の配達とかそういう町の役場の仕事を手伝ったりして。たまたま病院に連れていく坂下の厚生病院があったの。そこにおばちゃんたち三人ぐらい乗っけて行ったの。「あんた、よくやってくれてんでねえの」って。下着だの靴下だの、物資を配ったりもしてるから「今度、磐梯山が爆発したら、うちのほうに来て、ずっと泊まってってね」なんて言う。「はい、どうも」なんて。「東電です」なんて言えなくて。町の人には知ってるけど、こちらの人は坂下から、応援に来てる人だと思ってるじゃない。えらい優待遇されてさ。「磐梯山爆発したらこっちに来て泊まっていいんだよ」なんて。「すんのかな」なんて。そんな感じでずっと行ってたら、役場の人も全部が全部、私が東電から来てるって分かんなかったんだね。一部の人以外は。

そのうち役場の職員が、「あれは順ちゃんの妹だよ」みたいになったんだ。そうしたら、「なんだ、あんた順ちゃんの妹だっちゅうんじゃないの」なんて。それからがらっと変わって、食事は町長さんと一緒。そうなの。あと、そのときは、料理なんかも手伝っていたんです。避難した当時は。あと東電の食堂をやった鳥藤が、一週間ぐらいご飯炊きに来てくれた。本当に嬉しかった。助かった。労務のときは鳥藤を使ってたわけだけど。鳥藤の人間にも物資いっぱいあげて。ジーパンだなんだのいっぱいあったから。

また会社、本店でも、「佐藤さん、そこで何か不自由してるものない？」なんて。私は葛尾とかだったから、「じゅうたんみたいないっぱいちょうだい、風が吹くと寒いから」って言うと、ぼんぼん送ってくれて。机だのテーブルだの。すごいそういうのでは助かって、やたらとみんなに配って。配って歩くのも仕事だった。

会津といっても広いから。柳津とか、それから三島、あと、只見。あっちのほうにもいたから。只見なんて坂下から二時間ぐらいかかるんだよね。一人で行って、「本当にこの先にいるのかい」みたいな。そんなことやってた。

順：あっちのほうまで行ってたんだもん。只見のほうまで逃げて。

京子：労務課にいるときには、いつもいろんなところからお礼の手紙。ボーナスありがどうなんて。いや、私がしてるわけじゃないんだけど。懐から出してくるんだったらいいけどさ。会社のお金だから。いっぱい感謝されたね。そんなことではね。厳しく、労務管理がなんて言うときには、みんな「えー」みたいな、「時間外なんかやんないで帰りなさい」なんて言って歩くのも嫌がられたけど、ボーナスになると「ボーナスありがどう」なんて。ボーナスありがどうって言われても、私が出したわけじゃない。そんなこんなで。

一避難中に他の社員さんと連絡取り合ったりなどはありましたか？

京子：もちろん毎日ぐらい、副所長とか、猪苗代の電力所長とかが来てたから、一緒に回ろうとか。まあ各トップに、町長さんとかそういう所を回ってという感じだったり。親

密に連絡を取り合わないと、やってられないから。

ただ、うれしかったのは、鳥藤が炊き出しに来てくれたというのは、うれしいよね。「こんな所まで」って。大熊とか双葉の人がいっぱいいる所でなくて、そこは葛尾の避難所だったから。もちろん大熊、双葉は行ってるはずだから。でもこんな所まで来てくれたってというのがうれしかった。

東双不動産管理になっちゃったんだけど。あれが、鳥藤が社員食堂を仕切ってやってた。スタートからだったから、お世話になったから、会社も東双不動産管理ができたからって「はい、鳥藤、首」ってわけにはいかないと、鳥藤を頭にせずとやってたの。

それで、来てくれたのは私もびっくりしたの。労務課で鳥藤、管理もしてたのに、「ここまで来てくれたの」って。板下の川西小学校っていう小学校が廃校になった所だったんだけど、そこに来て三日間かな。

それで私、物資が会社から来てたからいっぱいあげて。ジーパンだの上着だの、そういうようなやつ。いいものからピンキリまで来てたのね。しまむらとかから、片やブランド品まで。マウント何とかなんていう、よく山系の人たちが着る有名なものがあるよね。ああいうのまで来てたんです。だからすごくそういうのも、彼らにやったの。何のお世話もできないから。うれしかったわ。それはそれで鳥藤に感謝だった。鳥藤来たのはそのあと。

一東電にお勤めだった経験で、いま役立ってることはありますか？

京子：役立ってないな、あまり。東電の仕事だから、退職してから役立つって。「あんた言ったよね。津波が来てもこの辺はたいした被害ないよ。リアス式海岸と違うから」なんて言ってたんだね。地域に行って、説明で。「来たでしょう、大きな津波が」、「すみません、受け売りの知識だったもんで」。

結局はだから今に役立ってる、いろんな人脈、いろんな人と知り合ったのはそれなりかな。こっちが知らなくても、向こうがよく知ってるの。企業の人とかも。「お世話になりました」とか。「誰なんだ、この人は。何の世話したの、私」みたいな。

一京子さんは年間を通して、どんな活動に参加していますか？

京子：私はボランティア。郡山でボランティアやっています。毎週火曜日。

がんで、抗がん剤をやると髪が抜けちゃうから、そのときに被ってもらう（帽子をタオルで作ってる）。そうです。私はこの手だから縫い物なんてできないから。それで私には「やんなくていいからね」なんてみんなに言われて。「京子ちゃん、縫わなくていいよ」なんて。型紙取って、型紙を描くじゃない。私はそこをのりしろ一センチ付けて、切る人なの。そうなの。設計図で取る人、私がそれを切って「はい、縫う人」みたいな。そんなの。

町の行事っていてもね。会社にいたときはいっぱい町の行事に参加するしかなくやってたけど、今はノータッチだな。

一今いわきの家は、誰がいてどういうことになってるんですか。

順：これも話せば長いんだけど。こいつの一緒に働いてた、原子力の運転の親方やってたの、そいつのうちだったの。そこが、息子が本当は今度入るわけだったんだけど、この騒ぎで、飛んじやったべ。息子がみんなあっちゃ行っちゃったから、あそこいられなくなったから、なかなか売れねえとかいって。

京子：もう何年も出してんだけど、広いからとか。

順：あれが「んじゃ、見てみっか」なんてな。みんないわきのほうさ、うち買ってるなんて言うから。

京子：会津にずっといるわけにいかないし。

順：それで、行ってみたのよ。そうしたら、ミカンがなってたの。

京子：そうなの。それに、みんなでそれに目が止まって。

順：こんなふうしてさ。いや、立派。なんだこれ、ミカンなってる。ミカンなってっからいいわなんて、土地買ったの。何年だ、あれ買って。

京子：六年ぐらい。（避難指示解除前の2018年頃に購入）

順：うん。そのころだ。だど、高かったな。あのいわきは高い。

京子：（今は）あんちゃんの同級生が管理してるの。言ったでしょう。（草が一本も）ない。綺麗なの。こんなじゃない。

順：彼女が専門でやってるから、だーっと。

京子：買っただけで誰も住んでない。

順：それが買ったときは、木がいっぱい植えてあって。

京子：ジャングル。

順：そうして木、片付けて。

京子：全部切って。

順：そうして今度、道が階段、うちに上がるのに階段っていうか。あれでは母は上がらんねえべ。ほんで、そこスロープに直して。

京子：六百万だっけ。すごいかかったの、それだけで。

順：母が風呂が入らんないっていうんだよ。

京子：風呂は二回も買い換えて。積水の一番新しいお風呂なんだけど、それがなんか、うちの母は気に入らなかった。それから今度またそれ取っ払って。今度、タカラホーローのをやって。

順：ほんで今度、タカラホーロー。またやり直し。

京子：一度も入ってない風呂もあったからね。おかしくない？それって。

順：そうして積水でやってる担当が、一回か二回しか入らないから、「俺、これもらって

ていいかな」なんて。ちょうどあそこの好間で、流されたんだと。うちが好間で。十九年に流されたべ。あそこだから、俺もらってっていいかな。こんなの二つもあったってしょうがねえから。「いいよ」なんて。

京子：住んでないよ。いまだに。

順：おっかあが亡くなっちゃったから。

京子：たまにうちの母の妹、東京のほうから来たりして、ここではあれだし、会津は狭いし
とって、じゃあいわきのうちに泊まろっかみたいなの。何回か泊まっただけ。

(中屋敷の避難指示が解除された) 最初の頃はね。母も病気。だからあっち(会津)のほうがっていうんで。

一順さんの小さい頃の夢は？

順：別にねえな。おら、小さい頃っていうのは、みんなトラックの運転手とか、そういうのが有名よ。いや、本当だって。トラックなんてねえんだから。バスだの。だから、そういうのの運転手してる人なんか、大したもんだと思ってたよ。だから、そういうの、大きくなったらな、うちの頃は、大人のへんのそのやってることは、そり引き。

京子：山の木の。

順：そり引きって知ってる？木でつくった、一般に木馬、岩手のほうとかあっち、山、会津のほうでは雪降ったとき、馬車とか馬でそれを木を引きずり出すのよ。あの木っていうのは、夏木は、こういう柱ね、うちつくる、夏切った木は駄目なのよ。水吸い上げてるから。で、冬の間の水の落ちてるとき切って、それを製材して柱にするわけ。そうすると、冬切れば、雪降るでしょう。そうすると、馬にこの木を、十メートルぐらいの木は、十メートルはないな、五、六メートルだな、十尺とか。十尺だから三メートルか。十二尺とか、四メートルぐらいな、こういうの。木二、三本付けて、馬で引きずって。ところが、おらの頃は馬もいねえから、人間がそれ引くわけよ。こういうそりっていうのをつくって。だから、そういうのはちっと怖いからな。それで怪我してね。栈橋って知ってる？こう、栈橋。谷に、ここ、やっぱり木運ぶから、水平にとんなきゃなんないでしょう。そうすると、こう、谷底、こういうところときは、そこに栈橋を架けて、道、水平にとるわけよ。すると、ここにこういう、これ、盤木って言うんだけど、盤木な、まあ枕木だな、早い話。今で言う。これをこう敷いて、下は高いよ、ここにこうやって、これをポンポン、ポンポンと渡って、うしろそり引いていくんだから。これ、外したらそりの下敷きになったり下に落っこちちゃうから。だから、そういう仕事は怖いでしょう。だから、やっぱりトラックの運転手とか、気を付けて、すごいな、かっこいいななんてやってたの。ちっちゃい頃はそんなんだよ。あんな大した夢はなかったよ。だから、昔、大体みんなそんなもんでねえか。ちっちゃい頃、おらのちっちゃい頃は。おらのちっちゃい頃は、福島大学に行っ

てお医者さんになろうかなんていうさ、いない、いない、いない。そんなのは全然いないから。

一 順さんの高校時代の思い出を教えてください

順：俺は、ここの、双葉農高ってあったの。おら行くとき、初めて農業土木科というのができたのよ。だから、ここさ行かなきゃ駄目なんだなんて、田中角栄だよ。日本列島改造論なんて。それでそこさ行かせようと思ってやったんだけど、駄目だな。(土木科の)一期。

京子：一期生は結構、優秀だったよね。

順：んだ。一期生は優秀。おらは優秀でねえべけど。

一 土木科や東京の測量学校に行くことを決めた理由は何ですか？

順：決めた理由なんて別にねえんだ、俺。この、測量、土木は、田中角栄が何とかっていうので、これからはこういう時代だなんて学校の先生が、この土木科っていうのができるからって、双葉農高にな、そこに行ったほうがいいなんて言うんだよ。うちからも近いようなことがあって。「そうか」と思って、いいんだ、高校なんてって、じゃあそこから行くからって言ったべ、行ったの。

一 順さんのお仕事について教えてください。

順：国土調査っていう仕事なんだよ。ほら、これ。県とか何かがみんな、各市町村がこの協会の会員なのよ。だから、うちの仕事は、一般の仕事はできないんだよ。一般のほうの測量とか、一般のはできないの。常にこれは国土調査とって、昭和二十五年、この法律ができて、二十六年に施行になって。

一 国土調査ではどこを測量したんですか？

順：うん。新地、原町。原町の次が常葉町、昔、今は田村って行ってな。常葉町。双葉の次が、やっぱり一年間のうちはそんなに歩かねえ、二回ぐらいしか歩かねえからな。あと、歩った。広野から、檜葉から、富岡から、いや、この浜通りはほとんど歩いてるんだいんちょ、いわきさは、俺は忙しくて行かねかったのね。いわきはハワイアンの件、やったんだな。ハワイアンセンターら辺をやったんだって、場所。俺は行かねがったよ。

一 国土調査のお仕事で印象に残っていることはありますか？

京子：仕事で、あんちゃんの仕事。

順：印象に残っているっちゃ、一回俺、やくざとけんかしたんだ。やくざ。やくざだよ。刑務所から出てきて、一カ月間かな、大したやくざでねかった。

一国土調査の経験で、いま役立ってることはありますか？

順：役立ってねえ。葛尾の役場なんて、終わってから「来て、測ってくんち」って言うんだから。

京子：去年ぐらいまで。それが、ただで。「日当もらってんの？」って言ったら、もらってねえ。

順：石井商店で、ラーメン食わせられて終わり。やってられねえ、とても。だけど、このごろは言ってよこさねえから。最後に言ってよこしたのは、去年のあれか。それも総務課で。「佐藤さん、今もやってんの？測ってもらいっち」、「駄目駄目、機械がぼっこっち、ないの」って言ったら「あいやー」。機械がぼっこっち、ない、それが一番。機械壊れちゃって測られねえって。

京子：でもいろんな、京都のほうに避難した人とか何かが、あんちゃんとうちの弟は土地家屋調査士の仕事してたから、だから、今こうなって逃げてって、土地がほら、どこからどこまで手放すなんていうの、そういうのは、よく来てやってるから、それはこうでああでとか、兄弟何人いるのとか。法律的なものが半分でしょう。あと土地。弟とあんちゃんですらそういうのをやってやると「助かったわ」って。いろんな京都のお土産とか送ってきたり。

一町のイベントに参加した経緯を教えてください

順：昔は町も、盆踊りだ何だやってたから。おら、いったところにいるぞ、その頃からずっと（町のイベントに参加していた）。大体、俺の友達とかそういうやつらが、笑うの

京子：やる人に見えないから。

順：だからみんな「えー、順ちゃんなんでそんなことやってんの」なんて。

んで、この集落（中屋敷）の区長をやっているんだよ。その頃（避難指示）解除になったのが、大川原と中屋敷だけだったの。ほんで、（区長だから半ば強制的に）引っ張られたの。とっくに今、ここら辺の解除になっているんだから、大熊でも駅前の辺だ、みんな解除になっているでしょう、違う人も今度、来たらいいでないのって。今度は、餅つきだから。

あと俺、ここだけの話で言うけども、こういう学生さんとかボランティアの人達がいなかったら、あのイベントはできないよ。

京子：そうだよ。よく言ってた、あんちゃん。

順：これからも、助けに来てください。大熊の、なつ祭りとか。ぜひお願いします。できないから、みんなが来てないと。

一仕事を通して学んだことや、仕事をやってよかったことはありますか？

順：今だったらこういうことは。

京子：いろんな人と知り合えたことじゃない。福島県は、本当によくもいろんな人来たん

だ。嫌んなるほど（笑）。ピンからキリまで。

順：おらが測量は、そんな、「この地主さんにお世話になってるから、地主さんの土地はちょっと大きく測りましょう」なんて、そんなことはできねえわけだから。だけでも、みんな「測量士さんに測ってもらわなきゃなんないから」なんてやったんだよ。

こういうことはあんだよ。だけでも、別にその土地が大きくなるとか、ちっちゃなところではないんだとは言うんだけど、「いや、そんなのは分かってるわい」なんて、んだけど、みんな喜んで来るんだな。なんかこういうのあったな。

でも、ジャガイモだの、いま頃はカボチャ、ダイコン、ハクサイ。いっぱいだから。いつの間にか、車に付けとくんだから。車のうしろに、こういうふうにいっぱい。

ああいう、「ハクサイできたから、持ってって食べてくんち」。こういうことがあったんだから、野菜なんて買ったことねえな、いま時分。

京子：ほとんど買ってないの。「もらったからある」なんて。その言い方がもうちょっとさ。「あるわよ」なんて言うんじゃないで、持って、そんなものいっぱいある。やっから取りに来な」、逆に。

順：そういうことあったよ。あと、餅なんても、この前も言ったけど。餅六十何ぼももらったり、毎年。きょう祭りだから、餅ついたから。今ごろだ。新米できて、餅ついたから。うん。餅持ってってくんち。「いいよ、餅は」、いや、そんなわけにいかねえ。何にも入ってねえからな。餅だから、こういうのは。かびちゃうから、たんがえておくと。持ってきたら今度、ここら辺さ、配んなきゃなんねえ。集落に餅を。やってらんねえぞ。あんな六十、七十も餅を分けて持ってって、何ともしようがねえべ。餅あんなに食いようねえぞ。

京子：東京やら北海道やらみんな送って。送り賃だけで貧乏こいちゃう。

順：そんなことあったぞ。

京子：よっぽどうれしいんだろうね、そうやって使ってもらえるっていうのが。半分遊びのような仕事だもんね、あんちゃんが。

順：遊びではないんだけども（笑）。そんなことねえ。だけでも、人夫の人が仕事を楽しいっていうんだ。

京子：東京電力には考えられない、あんちゃんの仕事ぶりは。

順：こんなに楽しく仕事できるなんてって。

京子：お金もそれなりだから。

順：「ずっとこの仕事が若いうちからあったら、おらずと出てたな」、なんて。いろいろあっちのほう、みんな出稼ぎなんだ、やっぱり。田村郡の常葉とか、あっちのほうの、昔はみんな出稼ぎで、神奈川よ、東京よ。出稼ぎでうち建てたなんていう人いたぞ。いろんなものを残して。東京のごみ捨てる所さ行って。そんなの持ってきて駄目だよ、今は。そこから自分のうちさ。机だのいろんなの。東京では使われるような

のが、みんなぶん投げてあるんだって。そして、もったいねえから、拾ってきてうちに送ってよこす。ほんで、うちを立派に。今度、金残って、うち建てたんだ。そんな人も出てきた。こういうたいしたもんだぞ。そんな人もいるぞ。

京子：免許取ったとかね。

順：そうだ。おらの仕事は。誰も使わないから、もう。おら使う頃は、六十五、七十くらいの人ばかりだから、誰もそんな仕事。若いのもいるけど、たぶんあれ、皆さんのような学生アルバイトだな。あとは、仕事に出てくるのは、普通の農家のじいちゃんばあちゃんだから。

大体、新しい人っていうのはあんまりいないんだけど、いつも使っていると仕事の要領が分かるわな。次は何やる、何やるって。だから、使っても楽よ。

例えばこういう、頭とがってる垂球ってあるでしょう。測量するときあれを、一本一本くいの頭さ糸を下げて、芯を合わせて立てなきゃなんないんだから。そういう仕事も、なかなか合わないんだ、三脚で。これが慣れてくるとすぐ合うんだな。そんなこんなで、おらとしても慣れてる人を使ったほうがやりいいわけ。だからそんだけずっとお世話になってたんだよ。

だから、別によかったということはないけども、みんな仕事しながら喜んでやってもらったのはよかったかな。

一原発ができるとなって、住民の人、大熊の人に何か説明とかあったんですか？

京子：原発ができる頃って、何だろう、私らも子どもだからね。説明ぐらいは。その頃、町会議員さんはどうだろう。あった？私より二つ上なんだから（笑）。どうなんでしょう、原発ができる。

いや、四十五年がオープンだから。そうだろうね、十年ぐらいは、やってるわよね。だから、私がそれが十八ぐらいで、十年くらい前といたら八歳？かわいい。

一何か造ってるなっていう意識はあったんですか？

京子：ない。土木工事。

順：原発？分かんないよ、全然分かんないな。

京子：全然。おそらく上ほうだけでやったと思うんだよ。住民一人一人とか、住民説明なんてのは、その時代にないね。あったのかもしれないけど、分かんないな。いや、とはいっても、一応、町は一緒だから。あったとしたら区長をやってたおじさんとか。

一原発に対してどのような思いを持っていましたか？

京子：私的にはあそこの会社の人間だから。原発ができて一番思ったのは、地域が潤っただけでも。いま結果こんなになっちゃったけど。そんでなかったらみんな東京のほうに出稼ぎとか行って、いつも「お父さん、ここにはいません」みたいなのがずっと続い

てたのが、誰も行かなくなって。一家に一人は発電所関係にいたってことは間違いないから。

順：んだな。みんな田村市の都路のほうからも、あっちのほうからも車がいっぱい来てたから。

京子：すごいよ。郡山、いわき、相馬の辺りからこっち。

順：本当だよ。（国道）288（号）なんて、今みたく、あんなトンネルなんてなかったでしょう。あの狭っこい所、すごい人だったから。

京子：その頃、半分、砂利道だったもの。最初の五、六年。

順：それがすごい人だったんだ。

京子：すごいんだよ、本当に。今もすごい。あの頃は今の場合じゃないもんね。すごい車。

順：ものすごい、最盛期の頃は。

京子：建設当時はすごかったね。

順：だってあっち、いま田村市になったけど、都路とかあっちのほうは、ほとんど仕事は。

京子：山の木を切る。

順：山の木を切って、炭を焼いてる時代の人。その当時、そんなのなくなったでしょう。ほとんどない時代だから。

京子：米とかもあまりできなかったから、都路のほう。自分で食べるぐらいは作ってたけど。

順：やっぱり原発ができたから、みんな原発さ来たよな。原発だから、前はちょっと、原発と言うとみんな頭に爆弾というのが来る。ちょっとよぎるんでないの？だけど、一人が、二人が、三人が来てるうち、「なんだ、こんな所か」なんて、「じゃあおらも、おらも」なんて。そうすると四時間とか五時間で、「仕事はあと大したことないだ」となんて。そうすると、みんな猫も杓子も。

京子：管理区域に入ると、三時間ぐらいしか働けないから。

順：そうすると、中には気が利いた人がいて、人夫出しというの。

京子：自分が今度、集めてきて。

順：自分が人夫で行って、そのうち、「何だ、あれはかえってもうかっていいな」なんて、「俺だって、ほんなこと、人集めていかれるわい」なんて、いつの間にか、今度はそんなことをやる人も。そんなのがいたよ。

だから、原発やってんだよ。浪江の辺だって、前は、東北電力で作るわけだったけども、反対したでしょう。あれだって本当は。

京子：できてたら大変だったね、同じく。東北電力。

順：浪江の辺だって、みんなこっちさ仕事に来てたから。何のかんの言っても、結果的には潤っていただろうな、原発で。

京子：それこそ二本松とか、そっちからもいっぱい来てましたよ。（国道）百十四号。こっちは（国道）288（号）だけど、あと六号線。いわきとか。あとこっちは相馬、新地のほうから。すごいんだ、発電所に来る車。朝、超渋滞。うちから発電所の近くま

で、あそこから三十分ぐらいかかるの。

順：そうして、俺なんかあっちのほうに仕事に行くと、「どこから来てんだい」なんて言うべ。「俺は大熊だ」なんて。「なんだ、おらげのほうの、こっちの息子も東電かい」なんて。「東電さ行ってんだぞ」なんて言うから、「あっちのほうから何とかって言うの行ってるか？」なんていうけど、「いっぱいいるから分かんないな」なんて言うと、違うんだ。

京子：社員なら分かるけど。

順：東電でなくて、その下請けとか孫請けとか、そこさ行ってる話だもの。みんな「東電」だから。「おらげのあっちの人も、みんな東電さん行ってるぞ」と。

京子：一番面白いのはうちの父ちゃんだ。私のこと、「誰が来たんだ。え、娘さん？どこ行ってるの？」って言ったら、「何だか東電とか言ってたな」って父ちゃんが言うじゃない。あんまりうちの父ちゃんは、どこにいるのかなんて眼中にないの。自分が「東電に行け」なんて言ったくせに。

そして「東芝辺り？」とか、その人聞いたら、「んだ、東芝だな」なんて言ったりする。隣の部屋で横になって寝てたら「えっ、東芝に行ってたっけ、私は」、適当。そのくらいなの。うちのお父ちゃんって、どこに行ってるなんて、まるで眼中にない。「東芝だ、んだ」、「東芝？私、東芝だっけ」。そのくらいだから、ぽかんとしてたよね。

順：そうだな。

一順さんがこれから生きる人に伝えたいことは？

京子：ああ、若い人とかに伝えたいこと。もっと授業を大事にして。

順：人々を助け合う心、ボランティアの気持ちを大切にしてください。

京子：そういう意味ね。自分が楽しようって考えてるだけじゃん。

一京子さんがこれから生きる人に伝えたいことは？

京子：伝えたいことね。（順さんの答えと）つながってるんではしょうがないか（笑）。そうだよ。これからの人に。お年寄りを大事にじゃないかもしれないけど。そうだよ。みんなで協力しないとできないし、若い人も年寄りも。

順：だな。だからこれからの人に、やっぱり仕事はどんな仕事でも、会社がなくなったではしょうがないけども、そうでなかったら、そこで長く勤めるのもいいんでねえかっては言ったんだけども。そういう会社とか仕事、職場。

京子：選んで。

順：選んで入ったほうが。今の、例えば何ていうの。

京子：ちょっと怒られたから辞めたとかさ、上司が嫌だとか。

順：辞める人がいるでしょう。昔はああいうのが当たり前だったから。怒られるというあ

れが。そうやって覚えてくわけだから。

京子：今はばっばばっばとパソコンの時代だから、嫌だったら辞めますっていうのが。自分が育たないと思うんだよね。嫌なとこ逃げて歩いてたら。私の会社にもそういう人がいて、「上司と合わないから、職場替えて」って。私もたまたまそういう知り合いの上司になってる、その一番偉いのが部長をやっていたから、それに頼んで違う職務に替えてもらったの。そしてそこで1年くらいいたら、またその上司が嫌だっていうの。それでメンタルになって来なくなったりしてて。また仕方ないからって、上の人に頼んで、二回くらい替えてやったの。やっぱり今も駄目だもんね。

だから、嫌だっていってそこを逃げちゃうんじゃなくて、嫌な自分をちゃんと分析して、自分の得意なのを生かして、そういう嫌だから次、嫌だから次ってやると、どこにも居場所がなくなっちゃうかなと思うよね。

順：そういうことあるな。

京子：そういうのは、しっかり自分で、自分を大事に。嫌だから逃げるんじゃなくて、そこでじゃあどうすればいいんだという、あと向きにも考えるのも。前向きはもちろん大事だけど、そういう、自分が何が駄目でこの人と合わないとか、そういう何か分析して、逃げないでほしい。

順：なんぼやかましいような親方がいても、親方は（歳が）大きいから。自分より小さい親方ってあまりいないから。親方っていうのは大きい人が多いから、いつかそっこのほうさ辞めていくから、それ我慢すれば大丈夫。

京子：そうだよ。自分がやりたいと思って入った会社だったり仕事だったら、それだけで辞めないで、頑張ってもらいたい。そこを土台にして、ワンステップ。そういうのはある。みんなばっばばって、仕事替える時代だから。もちろんそういう時代だから、それはそれで大事なんだろうけど。

順：面白いときもあるんだよ、いろいろ。仕事っていうのは面白くないときばかりではないんだ。

以上